

「話す・聞く」教材の取り扱い

1 はじめに

本シリーズは今回で十回を数えますが、今回はこれまで取り上げたことのない「話すこと・聞くこと」領域の教材を取り上げることにしました。「話す・聞く」学習には、「書く」学習や「読む」学習と大きく異なる性質があります。

その一つは、「話す（表現）」と「聞く（理解）」とが原則同時に展開するということです。それがどういう意味をもつかというと、学習の場において言葉をやりとりする人間同士の関係が好ましい状態に維持されていないと、この種の学習は成立が困難だということです。

山梨学院短期大学教授
松野洋人

もう一つは、音声は発すればすぐ消える（二過性）ということです。この性質を、学習の場においてどのように克服するのか、とりわけ評価場面においては工夫が必要になります。

と「話し合い・討論」と、二つの系統で構成されています。そして、各学年にそれぞれ一教材ずつ配置されています。

標題の教材（三学年）は後者の系統に属するもので、「パネル・ディスカッション」形式で話し合いを行うというものです。因みに、一学年には「グループ・ディスカッション」、二学年には「プレゼンテーション」が位置付けられており、本教材は、「話し合い・討論」学習の、中学校における総仕上げということができますし、広く「話す・聞く」学習の集大成という性格をも有しています。

2 「話し合って考えを深めよう」を例に

（1）教材の位置づけ

光村の教科書では、「話す・聞く」学習は、「話すこと・聞くこと」の基本

（2）教材の活用と留意点

教材は、パネル・ディスカッションの

手順について、次のような項立てをして丁寧に説明しています。

- ① テーマを決める／② 意見をもち、根拠となる事柄を調べる／③ 係を決める／④ 係同士の打ち合わせを行う
- ⑤ パネル・ディスカッションを行う
- ⑥ 討論を振り返る（表現を簡略化）

さらに、各項目についての具体的な例や、パネル・ディスカッションの注意点を示しており、それらを参考にしながら計画すれば、形としてのパネル・ディスカッションを展開することはできるで

しょう。

しかし、授業の成否は討論の質にかかっています。その鍵となるのは、話し合いのテーマに対する討論参加者全員の意識水準と保有情報量です。とりわけ各パネラーが、自身の意見について、どれだけ説得力のある根拠や理由を提示できるかが重要です。その準備については、教師もしっかりかわる必要があります。

どのようなテーマを設定するかということも、討論を深める上で重要です。教科書には、「言葉の使い方」に関するテーマが四例示されていますから、その中から選んだり、生徒や学校、地域に存在す

る問題、時事問題など広い範囲から、生徒が強い興味・関心を示す問題を選んだりすればよいでしょう。

⑥の「討論を振り返る」ステップも極めて重要です。一人一人の討論参加者が、このパネル・ディスカッションを通して、取り上げたテーマに対してどれだけ考えを深めることができたのか、その結果がこの授業の評価といつてよいでしょう。

3 おわりに

教科書には、巻末に「話し合う手だて 討論と会議」という資料があり、「バズ・セッション」「シンポジウム」「ディベート」等についての説明がされています。本教材と関連して取り上げ、さまざまな話し合いの形態について理解を深めさせることも効果的です。

また、教科書には文字教材という制約がありますから、音声言語関連の学習では、音声や映像等の教材についても、適当なものがあれば積極的に活用する姿勢が必要です。可能なら、教材を自作するということにも挑戦してみたいかが良いでしょう。

